土香る会

読書会感想文集 Vol.30

2020 年 6 月

【目次】

第 33 回読書会(2020.6.20)

有島武郎『クララの出家』・・・・ P1～

※ 土香る会が毎月行っている「読書会」に参加した方々が寄せた、感想文と報告を掲載しています。

Vol.29 からは、有島武郎の作品でまだ読んでいなかった小説の読書会、

いわば第4シリーズの読書会感想文集となりました。

●問合せ先／土香る会事務局（有島記念館内）0136-44-3245

第３３回読書会のまとめ

有島武郎『クララの出家』

2020.6.２０／参加者７名（うち感想文提出６名＋他感想文のみ提出参加３名）

【始めに】

２月を最後としてコロナ禍により中断していた読書会を４か月ぶりに開きました。場所は有島記念館側の東屋です。雨続きの合間を縫って開催は出来たものの、強い風に日差しの温もりも飛んでしまうほどでした。久し振りだったからか、感想文提出が多くて、それぞれを紹介するだけで時間を取られましたが､嬉しい悲鳴を上げてしまいました｡(キャー)

読書会に初参加という人がいました。当日は都合で欠席でしたが、感想を寄せて頂きました。主人公とともにドキドキしたり、主人公と同名の娘さんがいることから、読み進むにつれて巣立つ娘の姿を想像して悲喜こもごもの気持ちを味わったとあり、新鮮だなあという意見が多数。自分の生き方や現在の状況などと比べながら読むという、読書の基本を再認識した次第です。

【宗教の在り方】

どの宗教宗派であっても敬虔な信者はいますので軽軽に断定はできませんが、宗教の結びつきは他国よりも日本の方が緩やかではないかと思います。例えば、アメリカ出身の国際交流員によると、記念日とか復活祭などその時々に宗教に関することを家にいては親から、学校にあっては先生から教えられたと話してくれました。多様な宗教も持つ子供達が通う学校では無理なことでしょうが、カトリック系の学校だったので宗教教育もしやすかったと思われます。

参加者の中に小さい頃教会に通っていた人がいました。しかし神は自分を信じるものを救い、信じない人を地獄にやるのですから何と残酷なんだろうと思ったというエピソードを披露してくれました。宗教とはそういうものかもしれません。

また別の参加者からは、自分の家には神棚も仏壇もあるので自然に手を合わせているが特に深く考えたことはない、神社詣でをしたり墓参りもする。無神論者ではないが信心深いわけでもなく、心の拠り所の一つと捉えているという意見がありました。日本人が示す信仰の一つの有り様を言い当てたものだと思います。

【有島と登場人物】

この物語は聖フランシスコとキアラ（クララ）という 12～13 世紀にイタリアのアッシジに実在した二人を取り上げたものだという指摘が７人からありました。さらにこの話が雑誌「太陽」に掲載された（1917 年）という情報も２人からありました。私は実在の人物と思っていなくて、調べて分かったのでとても驚いたのですが、ほとんどの人が知っていた

とは。

さてその物語ですが、主人公の二人を全て忠実に描いたわけではなく、有島特有の描き方即ち、登場人物に自分を投影して物語にしたと考える人が多くいました。面白いことにクララの夢に現れるフランシスは実はクララ自身のことではないかと考える人がいたり、それぞれの登場人物が全て有島の持っている部分部分をそれぞれに人物化したものだという人もいます。信仰と性愛で悩むクララの姿を有島は描いているのですが、実在の人物であっただけに素直には受け入れられず、卑俗な男目線を感じたという参加者はクララをけなされている感じがしたと言っていました。でも性的欲求に対する葛藤はあるのではないか、共感できるという人もいて、実に様々です。

それにしても参加者の中に乙女の肉への憧れはもっと朧気で、幻滅に向かう前の光の玉のようなものではないかと感想を述べた人がいました。女性から見るとそんなものなのかと女性でない者は思うしかなく、この点については有島も男なので女性の視点から眺めることは出来なかったわけです。有島も一本取られたと思っているのではないかと思ったと同時に、だからこそクララという女性に自分を投影した言わば「第２有島」のような存在にしたという意見が出たのかと思いました。

フランシスとクララの出会いは偶然だったのか、運命であったのかとの問いかけがありましたが、有島の二元論に嵌まってしまいそうで話し合いは深まりません。それよりも、その二人は互いに恋愛感情を持っていたのかに関して３人から好き同士だったとか、結婚まで考えていたのではないかという意見があったことが驚きでした。フランシスはクララのことを懺悔の時まで知らなかったのではないかという意見に対して、小さな町だから話をしていなくてもきっと知っていたに違いないという考えが出され、これまた如何だったか読書会の場では分かりませんでした。

有島は裕福な家に生れながらも清貧を尊び、自らの気持ちに従って生きることの苦悩があったので、それを主人公クララが出家するときの思いに託して表現したのかもしれないとの意見がありました。その意味ではフランシスとも共振していたはずで、両方に自分を仮託していた可能性は大です。

また、実在の人物を登場させた作品として、以前読んだ『聖餐』に登場したマグダラのマリアの話も出ました。聖書三部作といい、『クララの出家』といい、基督教や聖書を取り上げるのは入信と棄教を経験した有島の特徴の一つなのでしょう。

【有島と聖フランシスコ】

主役クララに対して脇役のようになっているフランシスですが、実在した聖フランシスコについて書いてあるものを読むと有島との接点（何故有島が彼を取り上げたか）が見えてくるという意見があります。フランシスの一種の「宗教改革」的な説教は、当時既に十分権力化されていた教会体制への新鮮な批判と行動だったのではないかとの意見が出ましたが、同じく参加者からイエズス会司祭で上智大学名誉教授だった故ピーター・ミルワー

ド氏は聖フランシスコが教会は基督の家族たるべき事、さらに万人を含めた万物を同じ家族として遇することを主張し、教会制度の虚礼をなくそうとしたと述べていたとの情報提供もありました。形式的な教会主義の下で教義から離れた考え方や日常生活の信者に幻滅した有島と重なるものが感じられます。

もう一つ有島との接点を感じさせる提起がありました。聖フランシスコの死の床で歌われた「被造物の讃歌」の中に、「太陽・月・風・水・火・空気・大地」を兄弟姉妹として主への讃美に参加させているらしいという情報を元に、有島の農場解放の宣言中にある「生産の大本となる自然物即ち空気・水・土地の如き類のものは、人間全体で使うべきもので、或はその使用の結果が人間全体の役に立つよう仕向けられなければならない」という思想の源流になっているのではないかという新しい考えが出されたのです。そうかもしれないとの支持もありました。

さらなる接点もあります。聖フランシスコは所有することから争いや対立が起こると主張し、本当に必要なものは愛と平和のみでそれ以外は全て不要という極論を展開します。言わば平和主義と結びついた清貧の思想ですが、所有しないことがいいことですから貧しい人たちが理想的な暮らしをしているということになります。

そこで登場したのが、現ローマ教皇フランシスコです。彼に言及したのは一人でしたが、その情報によると聖フランシスコが創設したフランシスコ会から初めて教皇に選ばれた人です。彼はある都市でのミサ中に「特に身分の低い人、素朴な人、貧しい人、忘れられた人、世間の人びとから見て取るに足りない人々」という言い方をしてその人達に特別な気遣いをしていますが、これこそ聖フランシスコの思想であると言えるというのがその参加者の考えです。

有島は資本家が労働者から搾取するのを嫌いましたが、劣悪な労働環境、生活環境にいる人たちの姿が目に入る人だったと思います。当時では当たり前だった虐げられた人々、貧しい人々を多くの作品で描いています。これも聖フランシスコからの影響と考えられないでしょうか。有島は基督教から離れても、一切の所有を否定する聖フランシスコの思想への強い共感に自らを重ねたのだろうと別の参加者も言っています。

【有島と様々な愛】

有島が性愛をどう表現しているかのコメントもありました。モントルソリ家のパオロの記述ではバイセクシュアルを思わせる書き方だし、実際に親友であった森本厚吉とは同性愛ではなかったかという話もあるとの発言もありました。次に、フランシスは俗世間の婚姻制度を否定、即ち現実世界の男女関係を否定しているのではないかと提起して、後に有島が情死したことの伏線になっているのではと推論しました。さらには、クララが出家する朝、妹のアグネスを愛しく思い、抱きしめたくてのしかかった場面ではレズビアンを想像させると指摘。『或る女』や『生れ出づる悩み』にもＬＧＢＴ的な人物が登場したり、そういう表現があると言います。意外に先端を行く（？）有島の性を表しているのかもしれ

ません。こういう視点で有島の作品を読んでまとめてみると面白い結果が得られそうです。

【有島にとってこの作品の意味は？】

有島が棄教（教会を退会）した 1910（M43）年から７年経った 1917（T6）年にこの作品を書いたのは何故かという問いかけもありました。その参加者の答えは、信仰と愛の関係を一旦は総括して棄教したはずだったが、なお未解決の永遠の課題になっていることを告白したものではないかというものでした。「第四版序言」と名の付いた『リビングストン伝』序の中で有島は、妻を持つ身でありながらある人妻に想いを寄せたことを告白し、次のように書いていることをその根拠に挙げてくれました。

「私は神も信ずることができず、人も信ずることができず、自分も信ずることができなくなった。」

この有島の葛藤は情死に至るまで続いたのでしょうが、妻と父の死を契機に文学の道へと「出家」した有島の精神遍歴をこの作品に見た思いがしたと感想を披露してくれました。

【二つの愛と沈黙考】

前回に続いて感想文参加した人が、「跳躍」と「沈黙」という２つの視点を提供してくれました。一つ目の視点が次の文章についてです。

「心の眼鈍きものはまず肉によりて愛に目ざむるなり。愛に目ざめてそを哺（はぐく）むものは霊に至らざればやまざるを知らざるや。」

古い書物に書かれたこの文章に使われている２つの愛という言葉は異なる意味を持っていること。そして初めの愛から次の愛へは跳躍があるはずだが、そしてクララはその跳躍を体験したはずだが、何故、どのようなきっかけで跳躍が達成されるのか書物にも書いてない。有島も語っていないのは語るだけの用意がなかったからではないかということ。

ちなみに、同様のことを別の参加者も、クララが信仰心によって愛欲の世界を超えられると思い込んだ錯誤が示されていると指摘してくれました。

もう一つの視点は、クララがフランシスに懺悔をした後の場面です。会話の中にも地の文にも用心深く何度か「沈黙」が書き込まれ、その都度緊張感が高まるとその人は言います。では「沈黙」とは一体何なのでしょうか。その人の言葉を借ります。

人が沈黙するのは言うことを持たないからではなく、大事なことを言うか言うまいかためらっているからだ。つまり未分化なコトバが自分の中で次第に「大事なこと」に成熟する。それにつれて心の内圧が高まる。沈黙を通して心の中に溜った「大事なこと」がやがて言葉として発語される。その時初めて自分にも相手にも「大事なこと」として存在するものとなる。行動も発語と同じだと捉えられる。だから、地の文にある沈黙の後に続く言葉や行動はとりわけ切迫した意味をはらんでいる、と。

私はこれまで沈黙と書いてあれば、登場人物が何も喋らない時間があるくらいにしか考えていなかったので、こういう捉え方は大きな衝撃でしたし、同時に新鮮でもありました。

しかし有島はこういったことが分かった上で、台詞や地の文に意図的に「沈黙」を入れたのでしょうか。有島だからそうだという気がしますが、これまた有島を考える新たな切り口になりそうです。

さて、沈黙を考察してくれたその参加者には主人公クララの沈黙から見えるものがあるようです。

一つは、心身ともに神に捧げることの喜びを感じ、ひたすら祈るクララの姿です。また、自分でも分からなかったフランシスへの恋心をフランシス自身に言い当てられたことに対する動揺と感謝と謝罪の気持ちも見えるようです。

しかし有島の描くクララはそれだけに止まりません。愛し愛されたいと心の奥底で願う気持ち（世俗の愛）がまだ整理しきれずに残っており、そういう自分をどう扱ったらよいか計り兼ねているクララの姿も見えるようです。つまり、クララ自身は決着を付けたつもりでいたのに深層部分で出家前日まで聖と俗、愛と欲の二股に引き裂かれそうになっている姿がその人には見えるのです。

これには別の参加者からも同意見だと賛同がありました。そしてクララの苦悩する姿こそが、有島が自分の姿をそっくり写したものだとその賛同者は言います。やはり有島が重なっているのだと納得せざるを得ない立論だと私は思いました。

ちなみに、「沈黙」を考察した参加者は有島が禁じ手を使ったと言っていますが、それがどういうことかは感想文をお読みいただければと思います。

（文責：井上剛）

※参加者：磯野浩昭、磯野美和、井上剛、梅田滋、佐藤智恵子、高木直良、マイケル・バーンズ
（五十音順）

※感想文参加：菊地寛、玉田茂喜、藤波ひとみ

※以下感想文の掲載順は、概ね当日の発表順です。

自己紹介を兼ねて

Fjh.

京極町生まれで、いまも京極町で暮らしています。
社会福祉に関わる仕事をして 20 年が経ちました。20 年たってやっと、自分の仕事（地域福祉をすすめるということ）が見えてきました。
有島記念館が好きで、少しでも関わりを持ちたいと思い「土香る会」に入会しました。
でも、有島武郎の作品はほとんど読んだことが無いのです。これからは少しずつ読みます。
どうぞよろしくお願いします。

「クララの出家」を読みました。
感想にもならない感想を・・・少しだけ

　何も予備知識なく、前述したとおり有島作品もほとんど読んだことがない状態で読みました。出家というタイトルからは想像していなかった、夢の中で若い男性が接近してくる場面ではクララと一緒にドキドキしてしまいました。たぶん性的な欲求への葛藤なのでしょうか・・・共感でき・・・ますね。出家とは無縁でも、結婚して母となれば何らかの性的な葛藤はあるものです。
　そして、別の視点でも感情移入してしまいました。単純なことで、わたしには 3 人の娘がいますが（長女 18 歳、次女 16 歳、三女 8 歳）末娘の名が「くらら」というので、娘が巣立つような、悲しいような嬉しいような、そんな気分を味わいながら読みました。

崇高な作品に対して、このような感想しか書けず申し訳ありません。
みなさんと一緒にもっと学びたいです。

「クララの出家」から

Sac.

生まれ育つ中で、我が家にも神棚があり仏壇もあり、手を合わせたし、節目節目には神社に詣でもし、墓参りもしてきた。しかしお参りはしても、子供心に特に神仏について深く考えたことはなかったように思う。今も多少は考えたとしても、多少であり、突き詰めて考えてはいない。

自分が無神論者であるとは思っていないが、神仏とは何かわかってはいない。一つの心の拠り所なのかなとは思う。神仏を信仰している人々から見たら、私は不心得者であるかもしれない。

日本においても、諸外国においても、神や仏が生きるよすがであり、糧であった時代(今もそうであるかもしれないが)は多々あったし、信心からまた他の理由により出家する人々も少なからずいるであろうことは解る。貧しいから、苦しいから、虐げられているから、持たざる者だから、神仏にすがると思ってしまいがちだが、富める者も、持てる者も葛藤を抱え、神に平安の心を求めているのかとも思う。

信仰とは？・・・

「クララの出家」を読み、クララに心の動き、出家するに至る過程を見、また、アッシジのクララもフランシスも実在の人物である点からも宗教というものが、時代によるのかもしれないが、いかに人の心に根付いているかということを考えさせられます。宗教や信仰が歴史上の人物や小説の中に、色々見ることができることを思い起こし、感慨深いものを感じます。

クララの出家～パンセクシュアルな有島は訪れたアッシジを回想してみた～

Ism.

聖クララは、奇跡と白百合のような美しい心の持ち主として最も愛されている聖人ではないだろうか。

アッシジの聖フランシスコの清貧の教えに心を寄せ、神に仕えることを決意したクララの肉の夢は、有島オリジナルのちょっと卑俗な‘男’目線を感じた。実在の人物なので、太宰の「御伽草子」的なパロディーとして気軽には楽しめない。もし、その時代時代で本帯をつけるとしたら、どんな紹介文がつくのだろう。

ここからの感想は、少し前の時代の‘女’目線となるので、今の時代のセクシャルな課題に触れるとしたら、ご指摘ご鞭撻お願いいたします。

「平家物語」の祇王と仏御前が平清盛の身勝手な欲求から、すべての‘男’を敵に回したようなというより、下らぬ世俗に利用されたり陥れられる屈辱的なことから逃れるために出家したくだりが想い起こされた。

乙女の肉への憧れは、もっと朧気で、幻滅に向かう前の光の玉のようなものではないだろうか。クララの夢の描写は、有島の巧みな言葉に操られ神秘的ではあるが、‘男’が勝手に描く乙女への妄想。ここが、恋愛の縺れの根源かもしれない。

聖フランシスコがもし出家していなかったら、クララは憧れを抱くだろうか。家同士のために結婚するのは、どのような階級にあろうと世の常である。

聖クララは 17 歳で何を捨てて何を得ようとしたのだろう。出家する動機は、人それぞれであろう。

きっと、心がサファイヤの様に澄んでいるから、俗世が受け入れられない？

聖クララの現世への未練とは、どのようなものであったのだろう。既に出家している人に、俗世のセンティメンタルやロマンティックがなかったとは言い切れない。セクシャルを絡めずすべて憧憬や敬慕の感情で整理できるともわからない。第 2 の聖母マリア様になることを待ちわびているのではなく、身も心も神様に捧げ、神様の愛を人々のために伝える誓いをたてているのだけれど。

有島は愉快なまでに湧き出る言葉を表現力のままペンを走らせる。文章を真に受けていくと、少し才能の使い方を間違えたような作品とも思ったが、今の新しい教育を受けた世代にはすんなりと受け入れられるのであろうと思う。

女性が連れ立って宝塚や Disney に心をはせ足を向ける所以は、そこにあるのかもしれない。ノンセクシャルを有島は理解できるかな？

Kank note　有島 11 より
『クララの出家』

Kih.

中世イタリアへの誘い　丘陵のかなたから低く聴こえてくるのは賛美歌でしょうか。石だたみに靴音が響いて、800 年前からの歴史を今に語りかけてくれます。「クララの出家」（1917 年、雑誌「太陽」掲載）の舞台はイタリア中部の小都市・アッシジです。有島武郎は冒頭の場面を「1212 年 3 月 18 日、棕櫚の安息日の未明」と記し、読者を中世の石造りの街に導きます。

出逢いは運命か　ドキュメンタリータッチの導入は、表現の幅を広げようとの試みなのでしょうか。妻を亡くし、農科大学を辞し、新たな一歩を踏み出した 39 歳の筆に、脚光を浴びるようになった少壮作家の勢いが感じられます。有島はこの作品を発表する 10 年ほど前にイタリアを訪れています。構想はこの時期に芽吹き、発酵させていたのでしょうか。すでにキリスト教会から離れていたものの、ローマカトリック教の世界を背景に、18 歳の美少女クララと神の道を説く青年フランシスを登場させ、時を自在に動かしながら物語をすすめます。二人の出逢いは偶然だったのか、それとも運命であったのか。「人間生活史の中に起った実際の出来事の一つである」と書き出し、聖職に進もうとする者であっても悩み、惑い、感動する生身の人間であると、現実と夢を交錯させ、内面を影絵のように映し出しました。

葛藤が極まって　主人公クララは恵まれた貴族の娘として育ちました。安息日の朝、妹のアグネスを胸に寄りそわせてまどろむなかで、品の良い好青年と触れあおうとして心を咎めます。広場へ出るとよろけるような足取りのやせたフランシスの姿があります。夢の画像は寺院の中へと続き、クララは婚約者の愛を受け入れようとしない自分に気づき、生れた時から神にささげられていた自分の運命を思います。と、その時、光の中に投げ出されます。「天国に嫁ぐためにお前は清められるのだ」。クララは天使ガブリエルによって、炎の剣を乳房の間から下腹部まで突き刺されます。苦悶の中で目を開けると十字架にかかったキリストの姿が見えます。そこで夢は醒め、窓の外に目をやると寺院が見え、救世主のエルサレム入場を記念する寺の鐘が鳴りだすのです。

そして回想シーンへ。クララは 16 歳の夏、裸形で講壇に立つフランシスに出逢い、懺悔し、祈りの時を共有していました。若い二人の、はたしてそれは恋だったのか。心は神を間に通い合っていたのです。時を軽やかに超える作家の筆致は絶妙です。

託された作家の想い　クララ出家、その時に至ります。別れがたい母、妹。相いれなかった父ではあったが娘への想いは深いはず。信仰の世界へ踏み出してゆく若い女性の心理の綾が、コチコチと時を刻む秒針に表裏するように、複雑に織り上げられてゆきます。

階層が固定化された中世社会の規範の中で、聖フランチェスコに帰依し、敬虔な修道女

として修道会を主導する立場になってゆくクララです。有島武郎は自身の価値観、人生観を彼女の出家の時の想いに託して表現したのかもしれません。裕福な家に生まれながらも清貧を尊び、自らの気持ちに従って生きることの苦悩が重なり、共振しあうのでしょうか。

閑話休題　クララは 59 歳で生涯を閉じました。後にテレビの守護聖人とも称されますが、病に伏しているときには部屋の壁にミサを見ていたとの故事からです。800 年余の時を経、今日のコロナ禍にあっては、オンライン対話の守護聖人のような、親しみすら覚えます。(E)

「クララの出家」

Ish.

「これは正しく人間生活史の中に起こった実際の出来事の一つである。」

有島が冒頭で述べる。人間生活史？何だろう？とても違和感のある文言である。しかも正しいとは？調べてみると次の様なことらしい。 ＜人間生活史＞ ひとつは生物個体の発生から死までの全生活過程。また個人生涯の歴史。なるほど、これは有島自身の事で、クララの出家という真実にインスピレーションを受けて執筆した。これは有島の夢ではないか。そう思わせる作品である。
それは三つの夢から始まり。回想、出家当日の出来事で構成されている。

「数多い見知り越しの男たちの中で如何訳か三人だけがつぎつぎにクララの夢に現れた。」
これは有島に関わる 3 人の人物、もしくは有島自身か？・・・

>> モントルソリ家のパオロ
聖女の性では無く。普通の世俗的な性を表現している。性的比喩も用いて。とてもセクシュアリティー！
パオロを使って、有島自身が私は正常な男だと言っているのか。バイセクシャルではないと！いや逆にバイセクシャルだと肯定しているのか？

>> ベルナルドーネ家のフランシス
有島武郎は「クララの出家」を執筆する際に、アメリカ留学時期に読んだサバティエの『アシジの聖フランチェスコ』と、ヨルゲンセンの『アシジの聖フランシスコ』を参考にした。『アシジの聖フランチェスコ』によれば、戦争の絶えない時代に成長し たフランシスはアッシジの貴族として恵まれた地位と財産を全て捨て、神の道に入ったのである。

フランシスの回心場面より
「よく飲んで騒いだもんだ。さうだ、私は新妻の事を考へてゐる。然かし私が貰はうとする妻は君等には想像も 出来ない程美しい、富裕な、純潔な少女なんだ」というフランシスの結婚についての発言が明記されている。フ ランシスが言っている妻は明らかに観念上の神のことを指している。ここで浮上するのは 、俗なる世界の婚姻 制度を否定するフランシスの像である。
やはり有島はフランシスを自分と被せたのではないか？

>> 許婚のオッタヴィアナ・フォルテブラッチョ

「飽く事なき功名心と、強い意志と、生一本な気象とで、固い輪郭を描いてゐた」のような「日に焼けて男性的なの顔」を 持ち、「貴族的な誇りが包んでゐた」理想的な男性である。しかし、クララは「この青年の男らしい強さを尊敬してゐるくせ に」、その愛をおとなしく受け入れようとはしなかったのである。「男は入口にうずくまるフランシスに眼をつけると、きつとクララの方に鋭い眸を向けたが、フランシスの襟元を掴んで引きおこした・・クララは恐ろしい衝動を感じて夫れを見てゐた」と あるように、クララの目には、**許婚者は至上の権威の代表であり、恐れるべき対象であった。**この夢にもクララの父は登場 している。

やはりこれは有島の父ではないか？

>> 一つの回想

クララは寺院で説教を受ける時、フランシスへの愛慕の情を示した。「フランシスの眼は落着いた愛に満ち満ちてクララの眼をかき抱くやうにした。クララの心は酔ひしれて、フランシスの眼を通してその尊い魂を拝もうとした」。結局、「あなたは私を恋している」とフランシスに説破され、クララは泣いた。しかし、フランシスは 「私はあなたに値しない」といい、「あなたは神に行く前に私に寄道した」とクララにもう一つの道を示した。
クララが出家の決意を固めたのはフランシスに恋した時点ではなく、フランシスに恋が否定された後の話である。フランシスへの愛は男女の愛である。観念上の神を妻と見なすフランシスは、クララにも実在しない神の嫁になることを望んでいる。フランシスの心における神の存在は、現実世界の男女関係の否定と見るべきである。

結局、有島（フランシス）は迷路に嵌って、情死と言う方法をとってしまった。というより冷静に。これはその付箋か！

>> 出家当日の出来事

眼をあけると間近かにアグネスの眠った顔があった。クララを姉とも親とも慕う無邪気な、素直な、天使のように浄きよらかなアグネス。・・・そのアグネスのまつげはいつでも涙で洗ったように美しかった。殊に色白なその頬は寝入ってから健康そうに上気して、その間に形よく盛り上った小鼻は穏やかな呼吸と共に微細に震えていた。・・・無類な潤みを持った童女にしてはどこか哀れな、大きなその眼は見る事が出来なかった。クララは、見つめるほど、骨肉のいとしさがこみ上げて来て、そっと掌てのひらで髪から頬を撫なでさすった。その手に感ずる暖いなめらかな触感はクララの愛欲を火のようにした。クララは抱きしめて思い存分いとしがってやりたくなって半身を起して乗しかかった。同時にその場合の大事がクララを思いとどまらした。

これはレズビアン？・・・
すいません。ちょっと外れますが、
調べたところによれば、性の形はいろいろあって、ＬＧＢＴ。有島は何を言いたかったのか？
性的分別では男である有島の暴走？

確か『或る女』とか『生れ出る悩み』にもＬＧＢＴ的な人物が登場、表現されている。
結局、有島はこの作品で何を言いたかったのか、もしクララに会うことがあれば、決して目を合わせられない
状況なのに・・・
有島武郎さんへ
　有島様の自伝的「クララの出家」を読ませていただきました。
　非常にセクシュアリティーに私の事を描いていらっしゃいます。（行き過ぎじゃないの？）
　共感する部分はあまりありませんでしたが、とても興味を惹かれました。（やめてよなねーっつ）
　今後の活動に期待しております。（もう私は題材にしないでね。ほんとにもうっつ）
　あらあらかしこ。
アッシジのクララ

有島武郎はなぜ「クララの出家」を書いたのか

Tkn.

『クララの出家』（クララのしゅっけ）は、有島武郎の短編小説。実在の人物聖クララと聖フランシスコを描いている。1917 年 9 月 1 日に雑誌『太陽』に掲載された。

まず、この作品だけを読んでも武郎が何を言いたいのかはさっぱり分からないのではないか。少なくとも私はそうだった。「これも正しく人間生活史の中に起こった実際の出来事の一つである。」…冒頭に史実だと断り書きをしている。読み進むと舞台は「アッシジ」であることが分かる。どこかで聞き覚えのある地名だ。どこかを知るために、ネットで検索する、すると「アッシジのフランチェスコ」がすぐヒットし、富裕層の出であるがフランシスコ会の創始者であり、キリスト教界に新たな波を起こしたことが詳しく説明されている。冒頭に「史実」と断ってあるように、この作品の下敷きのような史実の解説を読むことができた。

最初は奇異に思われた彼の「基督を模範に生きる」という主張は徐々に共感を拡げ「12 人の伴侶（なかま）」と、イノセント三世から寺院での説教の許しを得ることになった。このことが分かるとようやく、その時期、その町の裕福な家の娘のクララの「出家」にまつわる話と分かり、改めて作品が確かに当時のフランシスの裸での「説教」とその影響の広がり、クララの「出家」という生き方を選択したしたときの心の動きの意味が見えてきた。

それでもクララが両親たちの期待を裏切る生き方を選んだ必然性は何だったのか。推測できるのは、フランシスの一種の「宗教革命」的な説教は、当時には十分権力化されていた教会体制への新鮮な批判と行動だったのだろうということだ。基督の生き方に習い、祈り、清貧、托鉢の生活は中世に確立していた修道士たちの宗教生活とは異なるもので、徐々に多くの支持者、同調者を生み出したが、その数がふえることによる複雑な問題を抱え込み、枝分かれが起きたことも必然だったようだ。

武郎はそうした一種の混乱の歴史をも知ったうえで、その始まりの 1212 年に舞台を設定し、直接的にフランシスの手引きで出家した少女を主人公にしたのではないかと思う。彼がキリスト教の洗礼を受けながら、アメリカ留学中に棄教した体験を持つからこその主題設定だと推定する。キリスト教から離れても一切の所有を否定する（物質的にも精神的にも貧しい）フランシスの思想への強い共感を自らを重ね、クララに託したのかも知れない。

ネット情報から、史実としてのフランチェスコの生涯は極めて波乱に富んでいたことが

分かった。読者の立場から見れば、クララよりもずっと読み応えのある小説にできたのではと思ってしまう。現に映画化（「ブラザー・サン　シスター・ムーン」など）されていることも知った。しかし、武郎は、クララの出家前の揺れる心情と決意を描く方を選んだ。武郎自身は「基督と結婚する」ことを悩みながらも選択したクララを祝福しているのか、憐れんでいるのかは私には疑問が残る。ただ、クララは人間フランシスに惹かれたのだと彼自身が伝えており、結局は基督ではなく人間としての彼とその仲間たちとの共同生活を選んだとことを描いたのではないかと思える。

感想文『クララの日記』

Int.

作品冒頭の一行を奇異に感じた。「実際の出来事の一つ」とある。小説の中でそう表現されてもにわかには信じ難い。ノンフィクションであれば、この出来事の詳細をどうやって知ったのだろうか？またフィクションであったとすれば、「実際の出来事」と書くことが作家に許されるものなのか？かような疑問が湧いてしまった。疑問として感想文に書いてみようかとか、そんなことをするのも興ざめか、などと思い巡らせた結果、触れないことに決めた。（といって触れているのが何とも恥ずかしい）

いよいよ本文である。１８頁しかない。例によって作者の意図が分からないので何回も読むことになる。短編なのですぐ読めてしまう。傍線を引いたり、余白に自分の思いついたことをメモしていく。十数回程読んで（と控えめに言うが）取り敢えず全体の構成を書き出す。３部構成だ。しかも全体が 1212 年３月 18 日の朝から真夜中までのわずか一日の話になっている。

第１部（ｐ１～６）目覚める直前に見た夢の話が６頁に亘っている。ちょっとおさらいしておくと、登場人物は３人の男性と天使ガブリエル。

一人目はモントルソリ家のパオロ。アッシジの貴族。高級な首飾りをクララに付けようと近づいてくる。クララは肉の誘惑を感じて我を忘れそうになり、彼の胸に倒れかかる。

〈場面転換〉そこにはパオロの胸はなく、真っ暗な中をどこまでも落ちていく。パオロの愛（肉欲と豊かさを暗示）を受け入れようとしていたから地獄に落ちていくのだと思い、神の子の婢女（しもべ）として生き通そうという神聖な誓言を忘れた報いだと観念する。

〈場面転換〉落ちながら一心に聖母を念じていると、ふと光ったものが目の前を通り過ぎたと感じる。気がつくと硬い足場に乗っていて、改悛者のように啜り泣いた。

〈場面転換〉泣いていると心が軽くなって、十ばかりの童女のような華やかな気分になっていく。歌声が聞こえ、**二人目ベルナルドーネ家のフランシス**が登場。彼も貴族である。十数人の青年たちと飲み歩いていたが、突然他の青年たちを先に行かせ、その場に残ったフランシスはマントと晴れ着をずたずたに破り捨てて悔恨の涙にむせび泣いている。クララは奇異の目でフランシスを見ていた。富裕階級であることを拒否するような彼の行動理由がまだ完全には理解できていない。

〈場面転換〉寺院の戸が開く。内部は暗い。クララは十歳から十八歳（現在のクララ）になっている。**三人目の男性はクララの許婚オッタヴィアナ・フォルテブラッチョ**。彼は寺院の入口にいるフランシスに気づくと襟元を掴んで引き起こしたはずなのに、彼は消えていて手元に残った服が２つに分かれてクララの父と母になる。クララは生まれた時から自分の運命が神に捧げられていたように思っているため、飽くことなき功名心、強い意志、生一本な気性を貴族的な誇りが包んでいるオッタヴィアナの愛をおとなしく受けようとは

しない。見ているうちに３人は足下の黒土に沈み込んでいき（家族と婚約者との永遠の別れを暗示)、クララに救いを求めるので彼らが沈んでいる泥の中に足を入れようとする。
〈場面転換〉その瞬間にクララは真っ黄色に照り輝く光の中に投げ出される。そこには天使ガブリエルがいて、天国に嫁ぐクララを清めようとしていた。ガブリエルは燃える炎の剣を乳房の間から下腹部まで刺し通す。苦悶するクララが眼を上げて見ると、十字架のキリストの姿が見え、有頂天になり声を出そうとしたところ（肉欲から解放されて霊の世界の住人になったことを暗示）で夢が覚める。

第２部（ｐ７～13）朝出掛けていった教会での出来事。この日は救世主のエルサレム入城を記念する棕櫚の安息日で特別な日だ。教会で座っているときに、16 歳の時（２年前）の夏の出来事を回想(p9～12）しているが、それが７頁中４ページに亘る。
第３部（ｐ14～18）真夜中に家を抜け出し、手はずどおり教友に助けを借りて礼拝所に向かう。家族も婚約者も富も身分も捨てて、清く貧しく生きる道を選ぶクララ。この最後のパートは５頁に亘る。

なぜ基督教にまつわる話を武郎が書くのか。この作品は 1917 (T6) 年に発表されている。妻と父をともに亡くした次の年に当たる。もう少し遡れば、1901(M34)年に札幌独立基督教会に入会するも、03～07 年の米国留学・欧州旅行を挟んで 1910(M43)年に同教会を退会している。武郎は基督教をどう考えていたのだろう。そう考えてもう一度３部構成を眺め、この作品の中で重要な登場人物は誰かと考えたとき、スポットライトに浮かび上がったのは第１部の夢にも登場し、第２部の教会でもクララの心を占めていた人物、フランシスであった。

夢の場面でクララは、貴族であるフランシスが笏を投げ出し、着ている服を破り捨て泣いているのを奇異に感じているが、なぜそう思うのかは未だ理解できていない。片や、教会のミサの途中、２年前のフランシスとの出来事を思い出しているが、この時はフランシスから自分が心身ともに神に捧げる運命であることを告げられている。こんなに重要なキャラクターは他にない。

ここまで来て突然、現ローマ教皇の名前がフランシスであることを思い出した。(フランシスコ会初の教皇である。余談だが、米国加州のサンフランシスコ市の名前はフランシスコ会の修道士が創設者の名前に因んで名付けたという。) 昨年は来日して長崎広島を始め各地を訪問して多忙な日程をこなしていた。
呼び名については教皇自身は伊語で「フランチェスコ」と発音したが、日本カトリック中央協議会は教皇大使館から「教皇フランシスコ」(英語は Pope Francis) という呼称で周知するよう指示されたらしい。驚いたのはその経過の中で、「アッシジの聖フランシスコ」

という名前が出てきたことである。何!?そんな聖人がいたのか!?奇妙な胸騒ぎを覚えて早速ウィキペディアで調べると、とんでもないことが分かった。

「アッシジの」と付いたので胸騒ぎがしたのだが、夢に現れた最初の男性は「アッシジの貴族」となっていた。３人の男性はアッシジに住む貴族とみて間違いない。「アッシジの聖フランシスコ」の説明を見ると、生誕 1182 年死没 1226 年 10 月３日とある。胸騒ぎが的中。舞台となった 1212 年はフランシス 30 歳の年である。ちなみに作品には 2 年前の回想シーンで「二十八のフランシス」の表記がある。以下にウィキペディアの説明と作品の符合する点を上げる。

・気前のよい散財家で享楽的な生活を送っていた。珍奇な衣服を好み、宴会の支払いを引受けていた。

・富裕な商人の子弟であったフランシスコの活動は奇行と捉えられ、市民の好奇と侮蔑の対象となった。

・ポルチウンクラの小聖堂近くに住んだ。

・行動の指針を与えたのは福音書に書かれたキリストや弟子たちの行動である。ある日ポルチウンクラの小聖堂で行われたミサの中で朗読されたイエスの言葉に感動し、それに従って直ちに履物を脱いで裸足となり、革のベルトを捨てて縄を腰に巻いた。

・1210 年、仲間が 12 人になっていた「小さき兄弟団」（現フランシスコ会の正式名称でもある）はローマに向かい、教皇インノケンティウス３世に謁見して活動の許可を求めた。

・アッシジの貴族の娘であるキアラ（クララ）はフランシスコの考えに共鳴して、1212 年の枝の主日の夜にもう一人の女性を伴って家を出た。フランシスコによる剃髪の後、近隣の女子修道院に身を寄せて清貧の生活を送りながら手仕事で生計を立て、病人などへの奉仕活動に身を捧げた。現在クララ会と呼ばれているフランシスコ会第二会（女子修道会）の開始である。やがて司教グイドによってサン・ダミアノ教会が提供されると、そこを拠点として「貧しき貴婦人たち」は兄弟団と共に発展していくことになる。

ここまで来れば、歴然としている。フランシスもクララも実在の人物である。しかもフランシスは後に聖人に列せられ、現在のフランシスコ会の創設者であり、クララは女子修道会の創始者と言ってよい。冒頭に、この作品の一行目が気になる話をしたが、武郎は史実を学びそれに基づいてこの２人に焦点を当てた話を書いたと思われる。

次に気になるのは、作品中の最重要人物であるフランシスに武郎がなぜ焦点を当てたかである。そこで聖フランシスコの思想をウィキペディアで見てみる。

フランシスコをよく表したものに死の床で歌われた「被造物の讃歌」（別名「太陽の讃歌」）がある。そこでは<u>太陽・月・風・水・火・空気・大地</u>を「兄弟姉妹」として主への讃美に参加させている（下線は引用者）。死までも「姉妹なる死」として迎えたとあった。フラン

シスコ自身の内部では、清貧と自由と神の摂理とが不可分に結びついていて、この三者が調和してこそ簡素で自然で純朴な明るい生活を営むことが出来るのだった。よって彼は珍しいほど自然と一体化した聖人として、国や宗派を超えて世界中の人びとから敬慕されている。

この部分を読んだとき、真っ先に思い浮かんだのが武郎の農場解放記念碑文である。「被造物の讃歌」からヒントを得た可能性もあると思う。

「生産の大本となる自然物即ち空気、水、土地の如き類のものは、人間全体で使うべきもので、或はその使用の結果が人間全体の役に立つよう仕向けられなければならないもので・・・」（下線は引用者）

別の記述を見る。フランシスコは自分たちのことを「小さき兄弟団」と名乗っていたが、彼の求めたものはただ神を讃美し、小鳥やオオカミなどを含む神のあらゆる被造物を自分の兄弟姉妹のように愛し、福音を伝え、単純と謙虚の道を歩むことであった。ピーター・ミルワード氏によれば、フランシスコは「兄弟」「姉妹」の語を用いることで基督教会がイエス・キリストの家族たるべき事を主張し、万人さらには万物を同じ家族として遇することにより、当時商業の勃興と並行して広がりつつあった教会制度及び国家制度における法的虚礼を排そうとしたものらしい。

武郎が教会主義や似非信者に愛想を尽かし、キリスト（教）の教えに戻るべきだと考えたと私は思うのだが、そうだとすれば聖フランシスコの思想に影響を受けたのかもしれない。

さらにフランシスコは人間にとって本当に必要なものは愛と平和だけであり、それ以外は全て不要であると主張。争いや対立は所有することに端を発すると説いたとある。従って、彼の清貧の思想は平和主義と分かちがたく結びついていた。ついでながら清貧について言えば、貧しさを礼賛することには徹底しており、物質的な豊かさのみならず精神的ないし知的な豊かさも認めなかった（学問や書籍は不要と言った）ほどであったらしいから、さすがの武郎もそこまでは真似できなかったのではないか。

思わぬ発見から話が横にそれたように思われるかもしれない。実は武郎はキリストの教えを体現しようとした聖フランシスコとクララの話を、自分の棄教（又は、基督教との関わり）を結びつけて作品化を試みたのではないかと私は思っている。出家（入信）と棄教は行動としては正反対であるが、キリスト（教）の教えを正しいと感じているのは共通しているだろう。聖フランシスコの「清貧と自由と神の摂理」が結びついている思想（武郎はこのために農場を解放したのだろうか）といい、「愛と平和」だけが本当に必要なものという考えといい、武郎の思想（作品や生活の根底にあるもの）がそれにかなり近いものだと思えてくる。

クララは出家することで家族や身分を捨てたわけだが、武郎はこの作品を書く前年に妻と父を亡くしており、父母を中心とする家族からの、また、それまでの生活や人生との訣別をして新たな作家としての生活、人生に入っていくのだという決意表明の意味も漂ってきそうだ。

さらに私がこの作品から読みとれるものは次のようなことだ。

国の中には富と地位と名誉を持っている少数の人びとがいる。貧しい暮らしの日々を送る（圧倒的）多数の人びとがいる。どちらに属するにせよ、この中から清く貧しく生きることを選ぶ者がキリストに従う者、基督教の信奉者と言えるのではないか（と武郎が言いたがっている気がする）。立派な人間の振りをする偽善者を嫌い、教会ではなくキリスト（教）の教えに忠実であろうとする武郎の心情がよく出ているし、底辺の人びとを貶め、軽蔑し、差別する自称基督教徒を厳しく指弾した作品と言えると思う。

最後に現ローマ教皇フランシスコが 2013 年３月 24 日枝の主日に行なったミサの説教で語った言葉を引用したい。

「イエスは人びとの心に深い希望を呼び覚ます。特に身分の低い人、素朴な人、貧しい人、忘れられた人、世間の人びとから見て取るに足りない人びとの心のうちに。イエスは人間の惨めな状態をよく知っておられます。彼は神の憐れみの御顔（みかお）を示し、からだと魂を癒やすために身をかがめます」（下線は引用者）。

有島読書ノート 27：
愛欲と信仰の相克を超える
～『クララの出家』

Um.

夢幻を伏流している透明度の高い地下水のように美しい、内面性の深い短編である。
この『クララの出家』（T6.9）が『カインの末裔』（T6.7）の直後発表されていることに、微かな驚きを覚えた。冒頭部分は白樺時代の作品のようにも感じられたが、しかし最後の場面では、その底知れぬ澱みに降りていく主人公を身動ぎもせず凝視している自分に気がつく。
クララの出家する先は、どのような境地なのだろう。
夢の中で循環しながら求心していくアイデンティティの深淵、だろうか。

３人の男が、次々にクララの夢に現れた。

「クララはやがてかのしなやかなパオロの手を自分の首に感じた。厚い指先と冷たい金属とが同時に皮膚に触れると、自制は全く失われてしまった。彼女は苦痛に等しい表情を顔に浮かべながら、眼を閉じて前に倒れかかった。そこにはパオロの胸がある筈だ。その胸に抱きとられる時にクララは元のクララではなくなるべき筈だ。」（『クララの出家』P132）

アッシジの貴族パオロの性的魅力でクララは幻惑され、その媚力によって地獄に堕ちていくと自覚した彼女は一心不乱に聖母を念じ、そこで夢は転換した。
性と信仰を二律背反とするクララは、武郎の仮の姿であろう。

「次の瞬間にクララは錠のおりた堂母の入口に身を投げかけて、犬のやうにまろびながら、悔恨の涙に咽び泣く若いフランシスを見た。彼女は奇異の思ひをしながら夫れを眺めていた。春の月は朧に霞んでこの光景を初めから仕舞まで照らしている。」（同上書P135）

騎士を出自とする若いフランシスは、その出自を恥じるかのように無頼の振る舞いに身を落とし自らを辱めるが、自己を欺瞞しきれずに苦しむ。その姿に、少女のクララは訳もわからず惹かれる。若いフランシスは、自らの出自に苦しんでいた武郎であり、その苦悩する姿に惹きこまれるクララもまた、登場人物を二重に仮託した武郎自身であろう。

そして、自己否定に苦しむフランシスを嘲笑する功名心の塊オッタビヤアナと、オッタビヤアナにクララを嫁がせたい彼女の両親。オッタビヤアナはクララの許婚となり彼女に愛を求めるが、クラ

ラはそれを受けようとしない。

「見ると三人は自分の方に手を延ばしている。而してその足は黒土の中にぢりぢりと沈み込んで行く。脅かすやうな父の顔も、嘆くやうな母の顔も、怨むやうなオッタビヤアナの顔も見る見る変わって眼に迫る難儀を救ってくれと、恥も忘れて叫ばんばかりに歪めた口を開いている。然し三人とも聲は立てずに死のやうに静かで陰鬱だった。・・・（中略）・・・クララは何もかも忘れて三人を救ふために泥の中に片足を入れようとした。その瞬間に彼女は真黄に照り輝く光の中に投げ出された。」（同上書P136）

家族や富など自分を世俗に繋ぎ止めるもの全てを捨てたい、と既にその計画を胸中に抱いていた武郎がここにいる。その自己否定の痛みと恍惚が、クララを介して武郎の胸を刺す。

「同時にガブリエルは爛々と燃える炎の剣をクララの乳房の間からづぶりとさし通した。燃えさかった尖頭は下腹部まで届いた。クララは苦悶の中に眼をあげてあたりを見た。まぶしい光に明滅して十字架にかかった基督の姿が厳かに見やられた。クララは有頂天になった。」（同上書P136）

三人の男たちそれぞれとクララは、みな武郎の分身劇中人物である。
その中で、静かに、密やかに異彩を放つのはフランシスである。

夢から覚めて現に戻ったクララは、夢と現の境が渾然と融解してしまったかのような心持ちで、彼女を待つ教会に赴く。

少女時代から心に深く刻まれたフランシスを求めて、クララはフランシスの説教を聞くために教会に赴いたことがあった。かつて乞食となって故郷を出奔した後にイノセント三世の印可により教会の人として戻ってきたフランシスが、説教をおこなうと知ったからであった。フランシスの意表をつく立ち居振る舞いに心奪われたクララは、フランシスに懺悔を申し出た。

「また長い沈黙がつづいた。フランシスはクララの頭に手を置きそへたまま黙祷していた。
「私の心もをののく。・・・私はあなたに値しない。あなたは神に行く前に私に寄り道した。・・さりながら愛によってつまづいた優しい心を神は許し給ふだろう。私の罪も亦許し給ふだろう」
*　かく云ってフランシスはすっと立ち上った。而して今までとは打って変わって神々しい威厳でクララを圧しながら言葉を続けた。」（同上書P142）*

フランシスは無言の懺悔からクララの心を読み、クララが夢で会った三人の男たちそれぞれの意味と位相を自身のうちに飲み込んでクララを受容した。受容した上で、突き放した。クララの愛を受容し、その上で、愛から信仰へと投げ返した。フランシスは、二人の間で一瞬に燃え上がった愛を

信仰に昇華するようにとクララに告げ、その儀式の渦中にクララを誘う。

クララは、現の中でその夢を見ていた。
そして、その夢を現として突き進む決意を密かに固め、家族にも告知することなく出家を決行した。
その決意は、フランシスへの愛とキリスト教の陳腐な教義によって固められたものであった。

「その時分クララは著者の知れないある古い書物の中に下のやうな文句を見出した。
「肉に溺れんとするものよ。肉は霊への誘惑なるを知らざるや。心の眼鈍きものはまづ肉によりて愛に目ざむるなり。愛に目ざめてそを哺むものは霊に至らざればやまざるを知らざるや。されど心の眼さときものは肉に倚らずして直に愛の隠るるところを知るなり。聖処女の肉によらずして救主を孕み給ひし如く、汝ら心の眼さときものは聖霊によりて諸善の胎たるべし。肉の世の広きに恐るる事勿れ。一度恐れざらば汝らは神の恩恵によりて心の眼さとく生まれたるものなることを覚るべし」
クララは幾度もそこを読み返した。彼女の迷いはこの珍しくもない句によって不思議に晴れて行った。而してフランシスに対して好意を持ち出した。フランシスを辨護する人がありでもすると、嫉妬を感じないではいられない程好意を持ち出した。その時からクララは凡ての縁談を顧みなくなった。」（同書P146～147）

クララが、信仰心によって愛欲の世界を超えられると思い込んだ錯誤が示されている。これは、この作品の中で武郎がクララに仮託したかつての自分であり、同じく自らを仮託したフランシスの内部矛盾と等しいものであると暗示している。
クララのこの矛盾は、クララがこれまで盲従してきた信仰との間の違和をも感じさせるものである。クララの密やかな無言の求愛に一瞬動揺したフランシスもまた、愛を信仰の世界に強引に追いやることの危うい破綻を予感させる。信仰への希求によって抑圧された彼女の性愛は、物語の最後に至って真の彼女を取り戻そうとするが、フランシスを心に定めて出家の道を歩き始めてしまった彼女は、痛みを伴う感傷のうちに自らの矛盾を祈りの中に封印する。

「フランシスとその伴侶との禮拝所なるポルチウンクウラの小龕の灯が遥か下の方に見え始める坂の突角に炬火を持った四人の教友がクララを待ち受けていた。今まで氷のやうに冷たく落ち着いていたクララの心は、瀕死者がこの世に最後の執着を感ずるやうにきびしく烈しく父母や妹を思った。炬火の光に照らされてクララの眼は未練にももう一度涙でかがやいた。いひ知れぬ淋しさがその若い心を襲った。
「私の為に祈って下さい」
クララは炬火を持った四人にすすり泣きながら歎願した。四人はクララを中央に置いて黙ったままうづくまった。」（同上書P148）

この場面でのクララは、フランシスとは微妙に異なる精神的位相を感じさせる。
フランシスは、クララに一瞬感じた愛をすでに封印し、信仰の世界に立ち戻っている。武郎がかつて願った、斯くありたい自分の未来像であろう。しかし、クララはその投企寸前で自身の内部矛盾に一瞬逆襲され、その混乱を必死に封印しようともがく。そんな彼女を彼女自身の深淵に引き込もうとしているのは、彼女が否定し超越しようと意識していたフランシスへの愛欲である。
クララの出家には、根源的な矛盾が解決されないまま宿っている。

「平原の平和な夜の沈黙を破って、遙か下のポルチウンクウラからは、新嫁を迎ふべき教友等が、心をこめて歌ひつれる合唱の聲が、静かにかすかにおごそかに聞こえてきた。」（同上書P148）

美しいエピローグだが、素直に酔いしれることのできない自分がいる。
それは、武郎の表現に隠された極上の美毒に反応してしまう、自分自身の精神の歪み故かもしれない。

この作品は、いく通りかの相異なる読み方を誘い出す奥行きの深さを感じさせる。
それは文学作品本来の力であり、読む人にとっての相異なる真実と魅力が読み取れる文学作品に、読み方や解釈の正解などありはしない。
『クララの出家』はその意味でも、暗喩性に優れた武郎の隠れた傑作といってよいと思う。

このことを踏まえながら、私は相関連する二つの疑問を心に抱えながら、この作品を読んだ。

武郎は、すでに棄教して（M43／札幌独立基督教会退会）久しいこの時期（T6）に、なぜこのような作品を書いたのだろうか。
また、この作品は信仰と出家を肯定的に描いたようなディテールに溢れているが、そこにはどのような意図が隠されているのだろうか。

自分のこの疑問を解く鍵がこの作品全体に潜んでいることを、何度か読みながら漸く感じ取った。
それは、上述の粗筋に付した自分の感想に表れているように思うが、改めて書き出すと、次のようになる。

物語全体の流れは、表面的には、愛欲や世俗との葛藤に打ち勝って信仰に入っていくクララの内面の推移を肯定的に描いていると読める。
しかし、ところどころに、そのような受け止めに疑問を感じさせるような仕掛けが潜んでいて、武郎の真意がどこにあったのか考え込まざるをえなくしている。
その際たる仕掛けは、すでに引用したように、クララがキリスト教の古い書物の力によって愛への憧れを信仰へと強引に変容せしめようとしていたにもかかわらず、そのことでかえってフランシス

への愛欲を掻き立ててしまった彼女の内部矛盾に触れた箇所に込められている。

これが、この作品の本質ではないか。
これこそ、武郎がすでに信仰と愛の関係を一旦は総括して棄教したはずだったにもかかわらず、彼にとってそれはなおかつ未解決の“永遠の”課題であることを告白しているのではないか。
しかも、妻安子を前年に亡くし、彼女との“性愛を忌避した愛の日々”への悔恨が“赤裸々なそのままの自分”というアイデンティティ模索の闇をますます深める一方だったこの時期だからこそ、改めて掘り返さざるを得なかったテーマだったのではないか。

「私はこうして信仰から離れてしまったのだ。それからの私は精神的には全く孤独なものとなった。・・(中略)・・と云って私は自分自身を律すべき法則を見出してはいなかった。私の心は放埒になった。不幸か幸か外部的な実行力の極めて薄弱な私はこれと云って目立った乱行はしなかったけれども、心の混乱はひどいものだった。妻を、愛する妻を持つ身でありながら、ある人妻に思いを寄せるような乱暴な心になってしまっていた。その人妻も私の顔付きから私の心を知ったに違いなかった。而して危ない機会が屢々乱暴な私の熱意を煽った。然し幸にして私は僅かに踏み止まった。私は神も信ずることができず、人も信ずることができず、自分も信ずることができなくなった。」
(『第四版序言』T8より)

このような精神的危機からの脱却は、安子との愛を振り返る過程でそれまで以上の真剣さで希求したはずである。信仰の対象を教会からイエスの愛に純化した武郎のキリスト教再定義と安子との愛を、対立する二元相克の関係として受け止めていたそれまでの思考の限界を覚り、そうではなく、安子との愛の中で疎外していた性愛、肉欲をも渾然と融合して一つと受け止める自分自身のアイデンティティを目指した精神営為の表現が、この作品だった。
その思索を、クララの内面と行動の混乱に満ちた軌跡に沿って表現することにより、そのクララを超えた彼方に武郎は自らの生き方を模索していたように思えてならない。
ちょうどこの２ヶ月前に発行した『カインの末裔』の仁右エ門においても、そうであったように。

自己の内面解剖に突き進んだ奇跡の３年間の嚆矢は、このような、安子への愛の振り返りを抜きにはありえないことだった。
安子の死と父武の死を契機に、文学の道へと「出家」した武郎の精神遍歴そのものを、この作品に読む思いがした。

（おわり）

『クララの出家』……聖女伝説への疑問

Tam.

『クララの出家』は、アッシジのフランチェスカと彼の初めての女弟子キアラの有名な逸話に基づいている。この逸話に有島が小説として付け加えたかったことは何だろうか。

物語は、後にクララ女子修道会を創立する修道女クララが 18 歳で出家する前日(作品では 1212 年 3 月 18 日と明示している)の朝から当日の払暁までの行動が回想を織り込んで複雑な構成をとって描かれており、敬虔な信仰の世界を感じさせもする作品である。けれど、そのように読むことに疑問も湧いてくる。今回、私は私が感じた疑問にこだわってクララを論じてみたい。クララを描く描き方の中に豊饒の年と評価される 1917 年における有島の文学的課題が表れていると思うからである。

読者は、「これも正しく人間生活史の中に起こった実際の出来事の一つである」という口上に誘われて作品世界に入って行くが、作品は〇で区切られた三つの部分で構成されている。便宜的に一章・二章・三章と呼ぶ。

一章は出家前日の朝に見た夢が中心で、クララ十八歳である。二章はクララ十六歳の秋、フランシスに懺悔を終えた後の会話が中心である。三章は十六歳の夏(秋より前)までのクララの信仰の軌跡を描いている。作者はこのような順で語っていくのだが、私には年齢に従ってクララがどのような道筋を辿って出家に至るかを追うほうがわかりやすい。それで、小説の構成とは逆の順で内容を検討していくことにする。引用は筑摩版の全集『クララの出家』を用い、すべて現代仮名遣いに改めた。

一　十六歳夏までのクララ　……　聖と俗の狭間から聖なる世界へ

三章では(p145 の最後のあたりから)クララがどのように育ったかが語られる。少しばかり気難しい子供だったらしいが、やがて(多分、10 歳を過ぎるころ)世の中には聖なる世界と俗なる世界の二つがあることに気づいて、聖なる世界を渇仰し始め、「平和を求めよ」と説く乞食僧に関心を持っていた。フランシスがその指導者として寺院再建の勧進を始めると、彼に注意を払うようになる。聖への憧れである。他方、モントリソリ家との縁談が持ち上がり夜ごとに男(多分、パオロ)が窓下で夜曲を歌うようになると、心を躍らせてもいた。俗へも惹かれるのである。が、自分を惹き付ける「この不思議な力を恐れ」て、近づくのは危険だという警戒心も働いている。聖と俗に引き裂かれていることを自覚している。そんな時、クララはある古い書物の中に次のような文句を見出した。

「肉に溺れんとするものよ。肉は霊への誘惑なるを知らざるや。心の眼鈍きものはまず肉によりて愛に目ざむるなり。愛に目ざめてそを哺むものは霊に至らざればやまざるを知

らざるや。」（p146）

クララは繰り返しこの文を読んで「迷い」が「不思議に晴れていった」。「迷い」とは自分が俗世界に惹き付けられることであり、惹かれる自分を義のないものとして責める心の在り方である。この迷いの解消とともに「フランシスに対して好意を持ち」始める。それまでは、「人知れず」「注意していた」だけだったのに今や積極的な「好意」で、半端なものではない。この「好意」は「迷い」がなくなっているのだから、世俗的な恋心の類ではなく、若い女性が若い男性に対して抱いて少しの不思議もない性的な欲望とか愛情などでもあり得ない。ひたすら「浄い心身を基督に献げる機ばかりを窺う」心持に変わっているのである。

そして十六歳の秋に転機が訪れるが、この点については次節で取り上げる。

それでは、クララを肉の世界から逃れさせた「この珍しくもない句」はどのような内容で、繰り返し読んだクララにどんな訓えを授けるのだろう。逐語的に解釈してみる。

「肉に溺れんとするものよ。」

これは呼びかけの言葉だ。「肉」は肉欲のことで、性的な欲望から様々な物質的な欲望までを含む幅広い概念だが、文脈から性的な欲望に限定して考えてみる。誰かを愛したり、誰かに愛されたいと願う欲望(以下、愛の欲望と呼ぶ)に執着する者に対して、そうした相互に交わされる愛や一方向的な愛を丸ごと否定したりはせず、次のように諭す。

「肉は霊への誘惑なるを知らざるや。」

愛の欲望に執着することが霊的な世界へ心が昇華される契機だと知っているか、そうなのだと言っている。愛の欲望は神が俗人を霊界に招いている証だというのだ。この場合、「肉」と「霊」は異質であって、愛の欲望の中に霊が宿ったり、霊が愛の欲望をその一部として含んだりはしないものだと考えている。だから愛の欲望が満たされたからと言って直ちに霊の世界に入れるというわけではない。

「心の眼鈍きものはまず肉によりて愛に目ざむるなり。」「愛に目ざめてそを哺むものは霊に至らざればやまざるを知らざるや。」

この文はとても難解だ。心眼の劣る俗人は初め愛の欲望を満たすことに囚われることがきっかけ(原因)となって愛に目覚める。愛に目覚めた者でその愛を育てる者は愛が霊に高められるまで愛を育て続けるのだ、というほどの意味だと思う。愛の欲望を満たそうとすることをきっかけとして愛に目覚めると言うときの二つの愛は同じものではない。後者は霊に至る愛だけれど、愛の欲望の愛は霊とは異質の俗世の愛でしかない。

書物の語り手が原文で「によりて」と言っているところを、私は「きっかけ(原因)となって」と解釈した。二つの愛の間には飛躍というか跳躍があるのだけれど、どのようなきっかけで飛躍するのか、どのような原因が事態を動かすのかという点について、語り手は語らず、有島自身も語っていない。目覚めたところの「愛」がどのようなものなのかについても書いていない。

確かに、小説の構成上で必要なことは、クララが愛の欲望に起因する「迷い」から醒めたと語ることであり、その意味ではどのような愛に目覚めたのか、基督の愛とはどのようなものかを読者に語るまでもない。小説の主題から外れるから有島も書かなかったとみる方が自然かもしれない。しかし、出家するクララにとってはいわば秘蹟に当たる飛躍がどのように訪れているのかを説き明かして読者を説得することがそんなに軽いことだとも思えない。有島はそのことを語りたくても語れなかったのではないかと思うのだ。この作品の後に『迷路』が書かれることを考えると余計にそのように感じられる。

三章における十六歳の夏(秋以前)のクララについては二つのことを確認しておきたい。一つは、聖なる世界への憧れとともに、俗世で自分が男たちにもてはやされる世界に胸をときめかせもした。心が両方の世界に引き裂かれかけているとき、古い書物の言葉によって、俗世への迷いがすっかり解消されて、ひたすら出家の機会をうかがう女性に変身していたこと。一つは、どのように愛の欲望から基督の愛への飛躍を遂げたのか、その愛は世俗の愛とどのように違うのかという点について古い書物の語り手も有島も語っていないということ。『クララの出家』の主題ではないともいえるが、有島の読者としては不満が残るということ。

二　十六歳秋のクララ　……「あなたは私に恋している」

二章におけるクララは 16 歳の秋を迎えていた。ローマで教皇から説教者の資格を認められて戻ってきたフランシスの説教を聞きに行ったが、その説教に感動して懺悔の申し込みをし、フランシスと対面する。その場面がこの章の中心である。クララは以前からフランシスに「好意」を抱いていたが、実際に話をしたことはなく、今回が初めて対面する機会だった。場面は、懺悔が終わった後である。しかし、ほとんど一方的にフランシスが話をし、その合間に作者がクララとフランシスの様子を描写(地の文)する。該当する本文は全集 p141 から p142 である。フランシスの言葉が 8 回、クララが 1 回、関連する地の文が 8 回ある。本来なら、それらを逐一取り上げて吟味するべきだけれど、膨大になるので、吟味するのは数か所に絞ることにしてその他の部分は流れを整理するのにとどめる。

さて、「あなたの懺悔は神に達した。神は嘉し給うた。アーメン」というフランシスの言葉から、クララは何か重大な罪を懺悔したはずだが、その内容については伏せられている。罪の内容は物語の展開上無視してよいほどのものなのだろう。その前後の地の文に目を止めると、クララはフランシスに陶酔しきっているようだ。例えば

「クララの燃える眼は命の綱のようにフランシスの眼にすがりついた。……クララの心は酔いしれて、フランシスの眼を通してその尊い魂を拝もうとした。」

「クララは…椅子から滑り下りると敷石の上に身を投げ出して、思い存分泣いた。その小さな心臓は無上の歓喜の為に破れようとした。思わず身をすり寄せて素足のままのフラ

ンシスの爪先に触れると…」

「無上の歓喜」は懺悔という行為や懺悔の内容が聴き届けられたことからくる法悦なのではなく、ほかの誰でもないフランシスその人が語る言葉だからこそ訪れるのだとわかる。有島はあえてクララに神とフランシスとを綯い交ぜにした微妙な感情の存在を示唆しているのだと、私には思える。この作品は出家という聖なる世界を目指す物語というだけではなく、性なる世界への執着をひそかに隠しているのではないか。

それはさておき、クララはフランシスの教えの忠実な実践者であることを讃えられている。「心が清く貧しいこと」、向上心、それに「沈黙」も加わる。

会話の中にも地の文にも用心深く何度か「沈黙」が書き込まれ、その都度緊張感が高まる。詩編 39 の第 1 節に「私の道を守ろう。舌で過ちを犯さぬように」という言葉があって「沈黙」の徳を称える言葉と理解されているらしい。沈黙は絶え間ない祈りを促すからだ。すると、神への絶え間ない敬虔な祈りをクララの沈黙は意味しており、フランシスはクララが神に祈る心を愛で、修道の友としてこの上なく喜ばしいと語っている。しかし、フランシスの沈黙と地の文の沈黙とは異なっている。

対話の場面で人はどのように沈黙するだろう。沈黙の間、心の中は決して空っぽであるわけではない。たいてい、何か大事なことを口にするべきか閉ざすべきかためらっているとみていい。しかし、このためらいにはもっと重大なことが隠れている。「大事なこと」が予め明確に準備されているならためらいは単に口に出すチャンスを待つということでしかないが、ためらいの中で人はこういうことを経験するのではないか。つまり、未分化なコトバが自分自身に向かって放たれ、次第に形を整えて「大事なこと」として成熟していく。内語として自らの心の中で対話が起こっていて、コトバの成熟につれ心の内圧が高まっていく。沈黙を通して心に溜った言葉未満の「大事なこと」はやがて臨界を超え言葉として発語され、その時初めて自らにも相手にも「大事なこと」として明確に存在するものとなる。行動もまたある種の言葉だから、行動という発語で表現されて初めて存在できる気持ちというものもある。だから地の文で示される沈黙の後に引き続く言葉や行動はとりわけ切迫した意味をはらんでいる。

先ほど引用したクララの行動もまた取り消しができないクララの思念(大事なこと)を示す雄弁な言葉なのだ。

クララにおいてそうであるなら、長い沈黙の後のフランシスの言葉も地の文も共に明確に存在し始めるだけでなく、取り消しえない気持ちの表現なのである。フランシスの言葉二つとそれに付随する地の文を続けて示してみる。

「あなたは私を恋している。」

「クララはぎょっとして更めて聖者を見た。フランシスは激しい心の動揺から咄嗟の間に立ち直っていた。」

「そんなに驚かないでもいい」
「クララは自分でも知らなかった自分の秘密をその時フランシスによって甫めて知った。長い間の不思議な心の迷いをクララは種々に解きわずらっていたが、それがその時初めて解かれたのだ。クララはフランシスの明察をなんと感謝していいのか、どう詫びねばならぬかを知らなかった。狂気のような自分の泣き声ばかりがクララの耳にやや暫らく痛ましく聞こえた。」

長い沈黙の後の言葉とそのいわば解説である。この部分は『クララの出家』という作品全体を支えている。なぜならフランシスがクララの心を言い当てる言葉であることがとりもなおさず「私もあなたを恋している」というフランシスの告白の意味を持つからである。
フランシスは初対面のクララの心に自分に対する恋情が潜むことを容易に見抜く力を持つ人物として描かれおり、しかも、クララが自分に恋心を抱くのは不謹慎なこととも不可思議なこととともみなしていない。だから、落ち着いて「驚かなくていい」と告げることができる。しかし、沈黙の意味を思い出してみると、沈黙の間にフランシスは「恋」のことをクララに告げるべきか否か考慮したであろうし、クララがどう反応するかも考慮のうちに入っていたはずだが、「あなたは私を恋している」の発語は自分自身の「激しい心の動揺」を招き寄せている。沈黙を破る前、彼は自らの未分化なコトバに気づきそのコトバをどうすべきか内圧が高まっていた。発語の後フランシスにさえ予期せぬ動揺が襲ってき。動揺という行動もまた言葉だから、有島はフランシスの恋を語っているのである。修道僧である私に恋情を抱くのはふさわしくないと冷静に伝えさせればいいだけのことなのにそのようには書いていない。まことに思いがけないことが生じてしまったと、有島はそのように展開している。しかも短時間のうちに動揺を抑え込むためには「驚かなくていい」の一言が必要だった。数年前までの放蕩の時代ならいざ知らず、教皇との謁見を経た只今のフランシスにとっては、この動揺は立場上あってはならないはずの事態だが地の文は動揺を吟味する方向への展開を見せない。
一方、地の文でのクララは吃驚し長い間の心の迷いがフランシスへの恋に起因していたと初めて気づき、気づきをもたらしたフランシスの明察に感謝し、また詫びる方法を知らないまま、声を立てて泣き崩れている。
このすぐ後にこの対話の場面におけるクララの唯一の言葉が発せられる。

「わが神、わが凡て」

修道僧への恋は禁じられているのに、尊いフランシスを恋するという大きな罪を犯し、不
敬を犯した、だから「神よ許し給え」という祈りだろうか。それとも、どれだけ大きな罪であり不敬であろうと今のこの心を捨てることはできない、許してほしい、どうすればい

いのか教えてほしいという祈りなのだろうか。「わが神、わが凡て」は二様に解釈ができる。
クララは事態の問題性について気づいており、すべての関連する問題も引き受けつつ「わが神よ、わが凡て」と呟く。事態の問題性は当然、有島自身のとらえていた問題性である。

「また長い沈黙がつづいた。フランシスはクララの頭に手を置き添えたまま黙とうしていた。」
「私の心もおののく。…私はあなたに値しない。あなたは神に行く前に私に寄道した。…さりながら愛によってつまずいた優しい心を神は許し給うだろう。私の罪をも亦許し給うだろう」

フランシスは沈黙の中で発語の直前まで高まった未分化なコトバを言葉に転換した。発語はフランシスの心が取り消しのできない存在に飛躍する行動である。思いがけず生じてしまった緊急事態を収束するための言葉が用意される。自分の罪を認めること、クララに道を示すことである。
「私は男としてあなたに愛される価値のないつまらない男だ、だから私を愛してはいけない」と自らを卑下しているが、それだけなら別の男を愛せということになる。そこで、「あなたの進むべき道は現身の男ではなく神への道だ」と説得する。すなわち、「私は神に行くべきあなたに現身の男を愛するという罪を犯させた罪深い男だ」と。
二人の罪はどうなるのか。「あなたはあなたの優しい心のせいで生身の男をしかも修道僧を愛するという過ちを犯したが、神はあなたの優しさに免じてその罪を許すだろう。」そして、「私を慈悲深い神は私が罪を認め、許しを乞うているゆえに、神に仕えるべきことをあなたに伝えるがゆえに、許されるだろう。」
これが事態を収束するための言葉だ。しかし、発せられた言葉はなかったことにはできない。そのうえ、こうクララに語るフランシスの心もクララの心が未だそうであるようにおののいている。おののくことはフランシスの解脱しきれていない心を語っている。するとフランシスの言葉は表面的な取り繕いでしかないように見えてくる。
しかし、そうはいってもフランシスは「激しい心の動揺から咄嗟の間に立ち直って」、クララに「神に仕える、神に嫁ぐ修道尼になりなさい」と命じるが、これは「私に恋するのはやめよ」という言葉でもある。クララはどうか。
時間の順序に並べてみると、解決したはずの問題が実は解決しないままになっていることが明白だ。二章の「あなたは私を恋している。」の部分はフランシスに懺悔をしたその場面の回想で、十六歳の秋の出来事である。恋に気づいて泣き崩れ、「神にとつぐ修道尼になれ」と命じられるクララを描いている。三章では十六歳の夏(秋以前)の、「肉」の世界に別れを告げ「恋」などするはずもない境地に至ったクララを描く。さらに、三章は続けて「その中に十六歳の秋が来て、フランシスの前に懺悔してから、彼女の心は全く肉の世界から逃れ出ることができた」(p147)という記述が来る。有島の語り(地の文)は明らかに食い違

っている。作者の破綻でないとするとどのように理解したらよいのだろう。少なくとも、十六歳の秋から十八歳の春までの１年半、クララには恋という感情をどうすればいいかという問題が提起され続けている。この１年半のクララの生活を知るためには既に二章も三章も役に立たない。可能性があるのは一章の出家の前日のクララを描く場面だけである。

二章の十六歳秋のクララは三章の十六歳夏までの若いクララを裏切っていたが、実は、一章のクララは二章と三章のクララとも異なっているように見える。

三　　大天使ガブリエル　……　三人の若者と父母

出家を明日に控えた十八歳のクララは恋という感情をどうすればいいかという問題の答えをどのように準備したのか。一章にはクララがその解決に努めた話は一切書かれていない。俗世への執着、愛の欲望が残ったまま明日、出家するという緊迫した状況にあるはずだが夢の話から始まる。

有島はどうして、茫漠とした夢という出来事を作品の冒頭に据えたのだろう。

一章は「又夢に襲われてクララは暗い中に目を覚ました」という一文から始まる。どんな夢かというと「数多い見知り越しの男たちの中で如何云う訳か三人だけがつぎつぎにクララの夢に現れる」夢である。同じ三人の男の夢を繰り返し見てきことが示唆されている。毎回同じ筋書きの夢かどうかは記されていないが、夢の意味としては同じだと推測できる。フロイトによれば、夢とは「抑圧されていた願望を幻覚的に充足する精神の機能で、夢の世界は無意識が意識に混交してくるため、意識の側から無意識を理解するのに適している(Wikipedia による)」とされる。願望が抑圧から全く解放されて表現される場合もあれば、夢の中でさえ意識によるさらなる検閲が行われている場合もある。

初めの夢は甘美な夢だ。登場するパオロは父が初めに結婚を勧めた相手で、夢の中でも父はそのようにふるまっている。

「青年の肉体が近寄るに従ってクララは甘い苦痛を感じた。青年が近寄るなと思うとクララはもう上気して軽い瞑眩に襲われた。胸の皮膚は擽られ、肉はしまり、血は心臓から早く強く押出された。胸から下の肢体は感触を失ったかと思うほどこわばって、その存在を思うことにすら、消え入るばかりの羞恥を覚えた。」

クララの心は官能の喜びに震えパオロを受け入れようとしている。しかし、

「もうパオロの胸に触れると思った瞬間は来て過ぎ去ったが、不思議にもその胸には触れないでクララの体は抵抗のない空間に傾き倒れていった。はっと驚く暇もなく彼女は何所とも判らない深みへ驀地に陥って行くのだった」。墜落しながら気が付く。「『地獄に落ちていくのだ』胆を裂くような心咎めが突然クララを襲った。それは本統はクララが始めから考えていた事なのだ。十六の歳から神の子基督の婢女として生き通そうと誓った、その神聖な誓言を忘れた報いに地獄に落ちるのに何の不思議がある。」

有島はクララに愛の欲望が成就する陶酔感を味わわせ、そのすぐ後で自己検閲をさせて、許されない願望なのだと認めさせ、地獄に落ちるのは当然だと自らを責めさせている。夢の最も核心にあるのはパオロがクララにとって近づきたいけれど近づいてはいけないアンビバレンツな存在であることだ。また、夢を検閲する意識は「禁止」を命じている。有島がひたすら敬虔な乙女の物語を書くつもりならば、このような場面を書く必要はない。肉の愛に近づきかけて危ういところで回避した賢い乙女を書きたいのでもなく、むしろ出家の前日でさえこのような夢を見る乙女なのだということだ。

二つ目の夢にはフランシスが登場する。十歳の童女に戻ったクララが広場の出来事を少し離れた自宅の窓辺から眺めている。既視感があるため出来事は予期する通りに進んでいく。

華奢な青年たちが青春を賛美する歌を歌って広場を通る。少し遅れてフランシスが夢遊病者のように歩いてくる。華美を極めた晴れ着を着、蝦茶のマントを着ていて他の青年たち以上にいかにも無頼の徒という様子だ。しかし、その顔は痩せ衰えて物凄いほど青白く、目は足元近くを見入ったまま瞬きもしない。青年たちはフランシスを取り囲んで「新妻のことでも想像して魂がもぬけたか」などと冷やかす。フランシスは狐が落ちたようにきょとんとして仲間の笑顔を苦々しげに見まわす。クララは即興詩でも聞くように興味を感じて窓から上体を乗り出して眺めている。と、フランシスは今まで耽っていた歓楽の思い出から醒めたように苦笑いをして、「私は新妻のことを考えている。しかし私が貰おうとする妻は君等には想像もできないほど美しい、富裕な、純潔な少女だ」と言う。彼は青年たちを先に行かせて一人になり、忌々しげにマントと晴れ着をずたずたに破り捨てた。次の瞬間、クララは教会の入り口に身を投げかけて悔恨の涙にむせび泣くフランシスを奇異の思いをしながら眺めていた。

十歳を過ぎたばかりの少女クララが初めてフランシスを見かけるころの出来事だ。放蕩時代の若々しいフランシスが魅力的な運命的な男性として登場している。しかし、彼は現在の放蕩生活に満足しておらず、疑問を感じているが、どこへ向かうべきかの確信がない。まだ出会ってはいないがクララと結婚するだろう予感を持っている。マントと着物を破り捨てるのは現在の生活への決別の意味である。捨てるものがいくつかある。予感に従って生じるだろう結婚もまたそのうちの一つである。悔恨の涙というのは放蕩を続けたことを懺悔する涙である。俗世から離れる決意を固めつつあるときの惜別の涙かもしれない。

この夢の場面にはクララが過ごしてきたたくさんの時間の経過が畳み込まれている。十八歳の夢の中に十歳のころに初めてフランシスを見かけて以来、十六歳夏までの自分、十六歳の秋の自分、それ以降 1 年半の自分。この複雑な時間の構造の中で見たフランシスの夢について、こう考えられないだろうか。夢に現れるフランシスは実はクララ自身のことではないかと。十八歳のクララが未だに恋心を抱く自らの姿をフランシスの姿に仮託し、人物を反転させている。だからフランシスに悔恨の涙を流させることはクララ自身が恋心

を清算すべきだということの確認である。それがこの夢の趣旨なのだと。長い間引きずってきた現世の愛の欲望はフランシスを激しく泣かせることによって終わりを迎えるべきだと夢を検閲しつつ言い聞かせている。

三番目の夢で、クララは十八歳の現在に戻っている。現在の婚約者フォルテブラッチョがクララに憤りを含んだ瞳を向け、フランシスの襟元をつかんで引き起こす。すると着物だけが宙に吊るしあがってフランシスの体は消えてしまう。やがて男の手元の着物が二つに分かれて一つはクララの父となり一つは母となる。クララは婚約者の愛をおとなしく受け入れようとしてこなかった。だから父は脅かすように、母は嘆くように、婚約者は怨むように並んで立っている。三人とも救いを求める顔つきに変わって多くの男女と同じく泥の海にゆっくりと沈み込んでいく。それは罪深い人たちが冥界へ沈んでいく姿だ。クララは何もかも忘れて三人を救おうと泥の海に片足を入れようとする。

婚約者に背き、両親にまで背を向けて出家しようとするクララの固い決意を示すと同時に、彼らの生き方は冥界へ向かう生き方でしかないことを示して自分の選択の正しさを強調している。両親に対しては彼らの願いに背くことに負い目を感じている。婚約者はクララを奪った男としてフランシスを憎んでいるとクララは解釈している。恋情はもちろん、現世への執着はすべて許されないのだということを自らに言い聞かせる夢である。

だとすれば、出家しないものはすべて冥界に行くのだろうか。俗世の俗人の生き方のすべては否定されるべきなのかという信仰における重大な問題は不問に付されている。これは元来、有島が答えるべき問題だがそれには答えようとしない。有島はこの時、巧みにこの難問から身をかわす。これも主題から外れる問いであろうから、私はこの小説に対するないものねだりをしているだけかもしれない。

三番目の夢の続きというより、三つの夢のまとめとでもいうべき場面が描かれる。

婚約者と父母の三人を助けようとした瞬間に照り輝く光の中に投げ出される。大天使ガブリエルがクララの胸をつかんで起き上がらせない。世俗に近づくのを禁じる。ガブリエルが「天国に嫁ぐ為におまえは浄められるのだ」と言うと同時に、「ガブリエルは爛爛と燃える炎の剣をクララの乳房の間からずぶりと刺し通した。燃えさかった尖頭は下腹部まで届いた。クララは苦悶の中に眼を挙げてあたりを見た。まぶしい光に明滅して十字架にかかった基督の姿が厳かに見やられた。クララは有頂天になった。」

ガブリエルがクララを浄め、聖別することで世俗における凡ての問題が雲散霧消する。クララの行動はいまだに愛の欲望に引きずられていた。しかし、ガブリエルが結論を導く。クララが一人でこの問題に直面させられたら、問題の存在そのものに打ちのめされ自力では解決できないからだ。神の僕となる身の 13 世紀人としてはこの上なく喜ばしい奇跡であろう。が、20 世紀の読み手としてはクララとともに喜ぶのにはためらいが残る。

半可通といわれるかもしれない。フロイトによれば、剣はペニスの象徴である。下腹部

まで貫く剣は象徴的に神と交わったという意味になる。三人の男たちとは結ばれることなく処女のままで、神に嫁ぐということが成就されたことになる。有島は夢の最後の場面で神の力を物語の中に呼び込んだ。愛の欲望がはらんでいた問題、聖と俗のはざまで俗人たちが抱える問題(クララも共有する)を、ガブリエルを登場させて不問に付してしまう。そうしないとしたらもっと違ったストーリーの組み立てをしなければならないはずだが、有島にその用意はなかった。しかし、三つの夢が全体として清純な乙女の敬虔な信仰の物語というには奇妙だということも確かだろう。危ういところで、教義問答に触れるのを切り抜けて物語を完結させたわけだ。

恩寵が与えられる瞬間が訪れることは、信者にとってこれにすぎる喜びはない。クララが有頂天になるのも当然である。恩寵という禁じ手を用いる以外に愛の欲望からの解脱を成功させる道筋を見つけ出せないという苦しい弁明をしているように見える。同時に、信者であり続けられなかった者は、恩寵に浴することもあり得ないと、かつて基督から離れたときと同じくこの物語を書きながら有島は苦い失望とともに確かめているのではないか。

小説は「出家」の成就のためにクララがフランシスの待つ修道院へ向かって星明りに導かれて坂道を降りていく場面で終わる。有島自身の信仰の問題は未解決のまま残っている。1917 年の有島は聖女の物語を決して美しく語ることはできなかった。

※ 追　記

有島は 1900 年 22 歳で基督教に入信し、1911 年に棄教している。その経緯について私は詳しいことを知らない。

しかし、信仰は思想・生き方の問題として軽々しいことではない。棄教の後、有島の思想・生き方の基盤はどこにあったか知りたいと思う。彼の作品の多くが基督教にかかわる内容だからだ。

『クララの出家』も、題材からして、キリスト教の教義についての洞察が盛り込まれるものと予測して読んだ。「愛の欲望」と修道尼になることとが調和的に描かれることを期待したのだけれど、結論は問題から逃げているあるいは答える用意はなかったということになった。有島自身によって突き詰められていない何かがある、基督教は棄教したとはいえ未だ考究の途上にあるのではないか。

しかし、書き終わって日が過ぎるにつれ、有島には当初から調和的な世界を描くつもりがなかったのかもしれないと感じ始めた。基督教会や教義に対する不信が根強くあった以上、13 世紀の修道院もきれいごとの世界ではなく、純潔な聖女という伝説にはまやかしがあると唱えようとしたのだと見たほうが物語の内容に整合する。現在のローマ法王が聖職者たちの性的虐待問題の弁明に苦慮していることから考えればうべなるかなとも思う。

有島の思想の骨格は西欧近代の合理的な精神によって形成されているのは確かだけれど、それだけでなく基督教、儒教的な教養など様々な要素が入り組んでいる。それらを腑分けできないだろうか、どこに躓きの石が隠れていたのだろうか、私の関心はこの点にある。